

## 審査員長 講評

川上 元美（デザイナー）

中谷宇吉郎は北海道の十勝岳で雪の結晶の研究を行い、多種の結晶の写真を撮影しました。そして、この撮影を基に編んだ、世界で初めて天然雪の包括的な分類図を著書『雪』に掲載しました。1938年のことです。そしてその分類図を1954年、ハーバード大学から出版された著書”Snow Crystals-natural and artificial”でさらに進め、7つの大分類、19の中分類、33の小分類に再編し、41の模式図として示しています。

時を経て、雪の結晶の観測は後続の研究者たちによって世界の各地で進められました。半世紀後には極寒地の南極、北極の地でも観察が進むなか、土地ごとの極端な温湿度の差といった気象条件の違いにより、中谷博士の分類表にはない新たな結晶形も発見されています。そのように多様な研究成果が生まれるなか、グローバルな分類が課題となり、「雪結晶の新しい分類表をつくる会」が2012年に雪氷の分類を再編・細分化しました。現在、そのグローバルな分類として認識されているものは8大分類、39中分類、121小分類であり、分類の数は、先駆者である中谷博士によるその約3倍となっています。雪の科学館の展示で、この新しいグローバル分類図を目にしました。専門的視点からは未だ不確定な部分があるにしろ、雪の結晶の多様さとともに、複雑に交錯した現象を有する自然界の奥深さに改めて驚かされます。

近年の人間の様々な営為による地球の温暖化や汚染などにより、自然の様相は方々で変化しています。遠くない未来に異変が起こり、「天からの手紙」の内容が書き換えられないよう、今を生きる私たちは努力をしなければなりません。

さて、この「雪のデザイン賞」は、今回で第10回、20年目を迎えましたが、審査のポイントは一貫して、雪氷の世界そのもの、そして中谷宇吉郎がその世界に寄せた思いに対し、応募者がどこに着目、解釈、表現したかという点です。昨年、中谷宇吉郎の直

弟子で、初回から審査員であった樋口敬二先生が亡くなりましたが、「雪のデザインを考えるに当たって、もっと雪の現象や仕組みを観察して、科学的視点も持っていたきたい」と、いつも穏やかに言われていたのを懐かしく思い出します。ご冥福をお祈りいたします。

節目である第10回のデザイン賞審査では、前館長の神田健三先生が新たに加われ、館内の新しい実験設備のことや、雪のチンダル像のことをうかがうことができました。このコンペティションに、雪の科学館、そして故・樋口先生の視点が保たれ続けることに安堵しています。

今回も応募内容は多岐にわたり、特に工芸、クラフトの領域は丁寧で安定した作品が多く見られました。第2次審査では、第1次の画像審査で入選となった39点の現物を対象に、受賞にふさわしい作品の選出に集中しました。

入選作品の現物を改めて見たとき、持ち前の技術や思いを総て作品に取り込んだゆえ、結果として雪氷のテーマがストレートに伝わってこない作品が散見されましたが、新しい挑戦とともに、テーマの選択や解釈の方向性などにこれから応募を志す人への指針を示す要素がある作品も見られました。その中で、受賞候補作品を選ぶ投票を通して満票を獲得した3作品を、上位3賞の対象として協議することとなりました。

金賞に選ばれた鎌倉恭子さんの作品「SHAPE OF SNOW」は、雪の結晶の造形の多様性と美しさへの興味が、結晶研究の歴史、結晶の仕組みなどの諸情報と結晶図をまとめたグラフィカルな表現に繋がっています。既に知られた物事に改めて目を向けること、そしてそれが想像や創作ではなく、科学的な検証に基づいた分類に忠実であろうとする姿勢には、今後の「雪のデザイン賞」に応募する人たちへの指針になるであろうと期待

が寄せられ、金賞へと繋がりました。

銀賞は鈴木優さんの「透氷光華 30」。重なる7枚の透明アクリルの上に花びらの文様が施されています。あたかも氷の中で花が開いたような像が浮かび上がるさまは、雪の科学館でも紹介されているチンダル現象を連想させます。自然科学の世界と、雪氷をテーマとした作品制作を結ぶ作品である点が評価されました。

斎藤朗子さんの銅賞「折紙雪華」。それぞれの結晶の形が、1枚の白い紙の折り、捻りという、素材と手わざのシンプルな組み合わせで生み出されている事に気付いた時に大きな驚きが沸き上がります。作品の繊細さが雪の美しさをストレートに伝えていることが、高い評価に繋がりました。

奨励賞5点と佳作10点はほぼ僅差で、同じ素材での作品を比較した場合、雪氷の解釈の深さや表現の新しさが各賞決定のポイントとなりました。各作品を細かく見ていけばいくほど、素材の扱いの新しさ、仕事の丁寧さ、そして雪氷の世界の表現についての深い配慮が伝わってきます。例えば、「拝伏」(六花の木皿)、「雪扇子」、「淡雪」(竹工)の誠実な仕事、ラトビア国境の小さな町の風景をイメージした「Memory out post(2019)」のような社会性や歴史がテーマをのせた新しさ、科学の世界での発見に遊びの要素を加えた「FOUNTAINRING, SNOWFLAKE」など、結果的には多様な視点が集まった受賞作の選出へと繋がったことは、第10回の大きな成果といえるでしょう。